がんばっぺ！気仙沼

がんばっぺ 気仙沼 応援団
発行日　2012年3月30日
第1巻　第5号
発　行　共生社会東日本地震被災者救援・支援の会

気仙沼復興支援フォーラム IN OSAKA開催

共生社会東日本地震被災者救援・支援の会は、今年度の活動の集大成として、3月23日、大阪市立大学大学院梅田サテライトで、「気仙沼復興支援フォーラムin Osaka」を開催した。フォーラムは、午前中に全体会（**写真右**）、午後に3つの分科会という2部構成で、50人余りが参加して、復興に向けた被災地の現状や課題、大阪からの支援のあり方などについて活発な意見交換が行われた。

支援の会の坂口一美常務理事の司会で午前10時に開始されたフォーラムでは、まず震災の犠牲者への追悼の黙祷からスタート。その後、事務局長の阪野修さんから挨拶があり、全体会の司会を担当する柏木宏理事長に引き継がれた。柏木理事長は、基調報告者、気仙沼市震災復興会議委員・気仙沼観光戦略会議副委員長の菅原昭彦氏を紹介。スライドを用いながら、震災から1年が経過しても、状況が余り変化していない地域も存在する実態が示された。復興が遅れている理由について、菅原氏は、国や県、自治体の復興計画の提示の遅れなどを指摘した。

午後の分科会は、支援の会の活動の3本柱である、青少年交流、スペシャル.ニーズ・グループ支援、復興支援に分かれて行われた。青少年交流では、支援の会の半田壱さんの司会により 気仙沼から気仙沼高校の荒木順教諭が発表。その後、大阪サイドから、気仙沼高校と交流している北摂つばさ高校の土居典子教諭と学生を組織し被災地へのボランティアバスツアーを実施している立命館大学の乾陽亮さんが報告、議論が行われた。

スペシャル・ニーズ・グループ支援、支援の会の杢千秋さんの司会で行われ、最初に気仙沼の特別養護老人ホーム春圃苑の芳賀勝成総務課長が報告に立った。続いて、震災後、気仙沼に17回入り、春圃苑の関係者を地元の尼崎に招くなど活発な支援活動を実施している、社会福祉法人阪神共同福祉会の中村大蔵理事長が報告した。

復興支援分科会は、柏木理事長の司会の下、津波で大きな被害を受けたカキ養殖業者のヤマヨ水産の小松武代表が、養殖再生に向けたオーナー制度への協力を依頼。これに対して、大阪から参加したアーユス仏教国際協力ネットワーク関西事務所の石田あゆみ氏から、同ネットワークによる被災地のカキの大阪での販売活動の紹介などが行われた。

分科会終了後、参加者は一堂に会し、分科会の内容を報告しあった後、午後3時半前に終了、解散した。

（写真）気仙沼から参加したゲスト。左から小松、芳賀、荒木、菅原の各氏。

気仙沼市について

- 人口：7万3000人余り
- 特産品：海産物が主で、フカヒレ、カツオ、カキ、サンマ、マンボウ、マグロ、アワビ、ウニなど
- 地酒：男山、角星
- 観光スポット：気仙沼大島、徳仙丈山つつじ
- 市の花と鳥:ヤマツツジ、ウミネコ（写真上）

目次：

ユースフォーラム、多様な問題議論	2
3.11 FROM KANSAIに参加	2
高校生ボラバス第3弾、冬休みに実施	3
ご寄付のお願い	4
メーリングリスト参加のお願い	4
好評「おでかけマップ」3号まで発行	4
編集後記	4

ユースフォーラム、多様な問題を議論

3月18日（日）午後1時から午後3時まで、大阪市立大学の梅田サテライトで、2011年度「大阪府の新しい公共支援事業」の補助金事業の一環として、気仙沼復興ユースフォーラムin Osakaを開催しました。

ゲストスピカーのひとり、気仙沼の阿部菜穂さんは、宮城県南三陸町で被災、自身は奇跡的に一命をとりとめたものの、最愛のお母さんを亡くされました。葬儀の3日後、8月3日より本会と北摂つばさ高校「がんばろう！つばさネットワーク」が招待した気仙沼高校の生徒11名の一人として来阪、以来、大阪の高校生との相互交流を通して、自らもボランティア活動をおこなってきました。この春、宮城県気仙沼高等学校を卒業後、帝京平成大学健康メディカル学部に進学予定です。

もう一人のゲストスピカーは、埼玉県出身、矢部寛明さん。大学時代日本をママチャリで縦断した際、一泊無償で泊めてもらった気仙沼のホテルの支援活動を震災直後から開始。現在も気仙沼で暮らし、ボランティア宿泊施設運営、学習支援活動などを展開。「NPO底上げ」代表を務め、精力的に活動しています。

また、特別ゲストに小松高志さんが参加。特定非営利活動法人　都市生活コミュニティセンター職員、阪神大震災当時支援のため長野県生協から派遣され活動したのがきっかけで、西宮にある現在のNPOに移り、活動を続けてこられました。東日本大震災では都市生活コミュニティセンターの初期救援活動に続き、職員として、3月26日から4月2日にかけて、岩手県宮古市にて救援スタッフとして活動されました。

当日の進行役は、「がんばろう！つばさネットワーク」代表松野雅一さん。若者の視点で、被災地の高齢者・障害者の被災の実態、福祉避難所・仮設住宅における生活実態やその支援課題、これからの復興・まちづくりについてなどについて具体的な論議を行いたいと考えました。

参加者の中には、大阪府立三国丘高等学校社会科研究部のメンバーや全国紙の新聞記者の方もおられ、いろいろな立場から意見がだされました。震災と若者に関するテーマにとどまらず、マスコミ報道のあり方や、瓦礫の受け入れ問題、地域から離れてからの被災地支援のあり方など、多岐にわたる議論となりました。

議論のなかで、阿部さんから地域を離れても、継続的な支援、情報発信などの活動をしていきたい、そのための組織作りをしていきたいとの話がありました。また、矢部さんからは、気仙沼で活動する若者の団体のネットワークで論議してきたことを行政が考える復興や街づくりに大いにいかしてほしいとの提言がありました。

また、特別ゲストの小松さんからは、阪神・淡路大震災の被災者等及び一般の高齢者、要介護者等に対する日常生活支援活動を実施し、併せて同様の支援活動を行っている市民活動団体へのサポート事業等を行うことによって、地域のコミュニティづくをしてきたことや、被災者の生活の視点に立った救援・復興支援のシステム作りの大切さが述べられました。また、組織として活動する各団体には、活動資金の問題が重くのしかかってきているとしたうえで、継続性、専門性を持てば資金の問題を避けて通れないなどの課題が話されました。

気仙沼を離れる若者が多い中、遠隔にあっても故郷である町の復興やまちづくりへの熱い思や、支援活動を継続していきたいとの大阪の若者たちの熱意が感じられるフォーラムとなりました。

3.11 FROM KANSAIに参加

東日本大震災から1年目の3月11日、全国各地で追悼などのイベントが開催された。大阪でも、3月10日と11日の二日間、梅田スカイビルを会場にして、3.11 from Kansaiが行われた。震災1年を迎え、復興への祈りを捧げるとともに、ボランティア活動のふりかえりや復興商品の販売、また、関西に避難して来られた方々の交流会を行い、関西から市民ができることを一緒に考え、復興とその支援は、まだまだこれからであることを関西の市民の立場から再確認し、広く社会に発信するためだ。

大阪ボランティア協会や大阪市社会福祉協議会、在阪企業などによる実行委員会形式だ行われたこのイベントに、大阪市立大学大学院都市共生社会研究分野が出展を決めたため、共生社会被災者救援・支援の会は、分野に協力、ブースを出展、分野や支援の会の活動を紹介する資料を配布したり、ビデオを上映したりした。野外のイベントで、あいにく両日とも天候はすぐれず、強風で展示物が倒れたり、チラシが飛ぶ場面も見られた。また、3月11日午後2時46分に黙祷をささげた直後、強い風と雨が降り注いだ瞬間は、2万人近い死者、行方不明者の悲しみが伝わってくるような印象を受けた。

一方、ビデオの上映中、じっと見つめる二人の女性の姿が目に入った。ビデオに写る被災地の出身者の姉妹で、大阪在住の姉を頼り、妹が避難してきたという。このように、被災地が身近に感じられるイベントだった。

写真は、出展に尽力した左から阪野修さん（分野4期生）、後藤陽子さん（博士課程在学）、三上友之さん（大阪府立大学大学院生）。

高校生のボラバス第3弾、冬休みに実施

共生社会東日本震災被災者救援・支援の会が協力・後援して「がんばろう！つばさネットワーク」主催による気仙沼現地ボランティアを実施しました。参加者は松野雅一団長以下、北摂つばさ高校生徒9名、柴島高校4名、鳳高校1名、枚方プラッツ2名、大学生3名、北摂つばさ高校教員3名、支援の会から坂口一美理事、阪野修事務局長夫妻のほか市大大学院から都市共生社会研究分野の弘田洋二教授、阿久澤麻理子教授、M2から半田壱さん、さらに松野代表の知人の横手研治さん、佐沼浩行さんが参加され、総勢31名で実施しました。

支援の会の支援活動としては、5月のゴールデンウィークに「がんばろう！つばさネットワーク」主催の気仙沼現地ボランティア、8月の気仙沼高校生徒の大阪招待、同月のボランティア・バスに続く企画でした。　12月22日の17～18時迄、参加者のうち高校生と大学生は、茨木市駅前にて街頭募金を実施した後、19時に北摂つばさ高校を出発しました。

南三陸町から気仙沼の沖合い、大島へ

翌日12月23日の朝、バスが経由した南三陸町では、役場の女性職員が防災無線で最期まで住民の避難を呼びかけた、という防災拠点ビルの残骸を確認しました。震災から9ヶ月を経過して、被災地では重機による残骸の除去作業が進展していました。しかし、自動車や建物の残骸が山のようになっている集積地が散見される反面、ボランティアが人海戦術でできる活動場所が皆無になっている、という状況でした。メンバー31名は、道幅が狭いために、今もなお、重機が入れずガレキが沿岸に放置されているという気仙沼の沖合いにある大島で、ガレキ除去作業（写真上）をしました。

大島と気仙沼の間の海はカキやホタテの養殖イカダが海一面に広がる風光明媚な景色でしたが、津波の際に原油タンクが車や船とともに転がり発火し、炎上しているところに重油をたれ流していったために、文字通り3日間、火の海となり全てのイカダが燃え尽きてしまったのです。その間、波状的に津波が襲った大島は中央の標高の低いところが津波に呑まれ、1つの島が2つの島になったそうです。

作業として一方で海辺に埋まったドラム缶や様々なガレキを掘り起こしては集積する作業、他方で全国から送られてきたイカダ用のナイロンロープを切りそろえる作業を行いました。

農家での生活体験と高齢者施設訪問

宿泊は山間部である気仙沼市八瀬の農家で民家宿泊をしました。参加メンバーはそれぞれの農家で東北の農家の生活を体験することとなりました。山間部で津波の被害に遭わなかった地域でも1ヶ月間は電気が通らなかったことや、全国のボランティアの宿泊を提供していたことなどを伺いました。

12月24日は、特別養護老人ホーム春圃苑で高齢者の介助支援を行いました。春圃苑は崖の上にある施設です。津波がくるまでは、崖の下に白砂青松の海岸が何キロも繋がり、その内側にはJR線が走り、さらにその内側には集落と遊園地、ホテル、高大な駐車場が広がっていましたが、今は、海岸線が300メートルも内陸部に食い込み、松林、JR線、集落、遊園地、駐車場が海へと持って行かれてしまったそうです。

当時の様子をうかがい知るのは、数キロ先の崖にあるJR線のトンネル、津波で動いてしまったホテルの残骸だけです。交流した高齢者のなかには、津波で帰る家を失ってしまった方が多数含まれてました。

気仙沼高校の生徒と再会

最終日12月25日は、仮設住宅で気仙沼で再開した商店やレストランを紹介する「おでかけマップ」配布の後、復興商店街のオープニングセレモニーへの参加。子どもたちへのプログラムとしてスポンジケーキをふるまいました（写真下）。また、気仙沼高校での高校生交流をしました。気仙沼高校では8月以来の再会を喜んで会話を楽しみながら、その後のお互いの生活を確認し合うひとときとなりました。これまでの交流の中心だった3年生は間もなく卒業する時期だったので、その前に再会できたのは大きな意味があったといえます。

今回の現地ボランティアは復旧・復興のための作業とともに、人と人との交流が大事になってくる、ということを示唆する機会になったといえます。

共生社会
東日本地震被災者
救援・支援の会

〒530-0001
大阪市北区梅田1-1-2-600
大阪駅前第2ビル6階
大阪市立大学大学院創造都市研究科
都市共生社会研究分野
柏木宏研究室気付
E-mail: kashiwagi@gscc.osaka-cu.ac.jp

ご寄付のお願い

振り込み先:
共生社会東日本地震被災者救援・支援の会

▽ゆうちょ銀行からの振り込み
ゆうちょ銀行
記号14180　番号54656361

▽他銀行からゆうちょ銀行への振り込み
店名　四一八(ヨンイチハチ)店番418
普通貯金　口座番号5465636

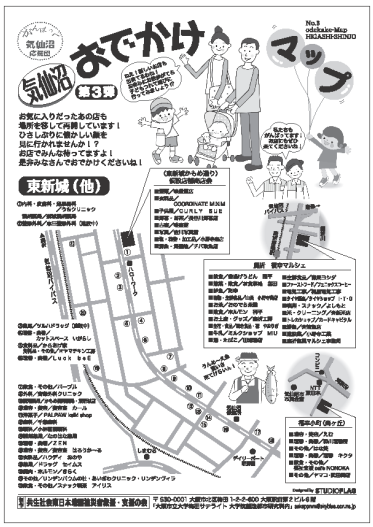
共生社会東日本地震被災者救援・支援の会とは？

3月11日の東日本大震災発生直後、大阪市立大学大学院創造都市研究科都市共生社会研究分野の教員・院生・修了生を中心に設立された任意団体です。宮城県気仙沼周辺地域の被災者への救援と地域の復興活動を支援するために、大阪でNPO、行政、企業と連携しながら活動を進めています。

好評「おでかけマップ」3号まで発行

気仙沼の中心市街地は、東日本大震災で生じた津波により、大きな打撃を受け、多くの商店や飲食店は閉鎖や移転を余儀なくされました。しかし、昨年秋以降、一部の商店やレストランが相次いで、再開。また、仮設の商店街もオープンするようになりました。しかし、震災前と異なる場所で再開したりするケースも多いうえ、現地では以前として情報が十分行き渡っていないこともあり、再開したことが余り知られないことも多いということでした。このため、共生社会東日本地震被災者救援・支援の会では、気仙沼の現地スタッフを中心に、再開または仮設商店街でオープンした商店や飲食店を紹介するリーフレット「おでかけマップ」を作成することにしました。

「おでかけマップ」第一号では、昨年12月24日に仮設商店街のひとつ、南町紫市場がオープンするのにあわせて、気仙沼横町の復興屋台村と田谷通りの福幸小町を含め、田中大通り沿いからスーパージャンボの周辺までの地域の48店舗を紹介するガイドとして発行。今年2月に発行された第2号は、田中大通りを中心に、南は魚の駅、北はメイプルハイツまで35の店舗をリストアップしています。第3号は、東新城かもめ通りの仮設商店街、鹿折の復幸マルシェ、南ヶ丘の福幸小町の3ケ所を中心に紹介するものとして、3月末に発行しました。近いうえに支援の会のウエブサイトにも掲載予定ですので、御覧いただければ幸いです。



☆メーリングリスト参加のご案内☆

被災者支援の会では、メーリングリストを作成して、情報の伝達と共有化を図っています。どなたでもお入りいただけますので、ぜひご参加ください。参加申し込みは、以下まで。

SHINKA Junko <shin_casshern@hotmail.com>

編集後記

昨年の3月11日の午後、前日アメリカから戻ったばかりで時差ぼけの私は、転寝をしていた。ふと、目を覚ますと、マンションがゆらゆらと揺れている。かなり長く感じたが、2分程度だったようだ。その後、テレビをつけると、津波が襲ってくるシーンが映し出されていた。東日本大震災と大津波である。

この直後から、支援活動を行おうとする人々の意識と行動が全国に溢れていった。しかし、支援活動に向けた情報がない。私たち、共生社会被災者救援支援の会を立ち上げた3月20日も、そうした状況だった。やがて大量の情報がもたらされ、活動も広がっていく。

あれから1年。3月11日には本紙2ページで紹介した「3.11 from Kansai」に参加、17日には堺市で講演、23日には支援の会主催の気仙沼復興支援フォーラムを開催、翌24日には尼崎市で司会と、震災関係のイベントに追われる日々となった。

こうしたイベントでは、「忘れない」「語り継ぐ」などのことばが耳に残った。被災者への継続的な支援への決意なのだろうが、忘れられつつある現実も反映しているように思える。被災地へのボランティアは激減し、義捐金も大幅に減っているからだ。

支援の会の活動は、来年度も続く。しかし、再来年はどうなるのか、と聞かれると「？」といわざるをえない。被災地にニーズがなくなるのであれば問題ない。しかし、ニーズがある以上、どうやって継続していくのか考えなければならない1年になる気がする。(HK)